

第40回全国公民館研修会東京大会

平成30年11月1～2日

場所：日本青年会館ホール

参加者：委員9名 職員2名

テーマ・ 公民館がひらく日本の未来

～地域性・個別性を活かした新しい公民館活動～

記念講演 池上 彰氏（ジャーナリスト）「 民主主義と公民館運動 」

社会の未来を持続可能なものにするために、民主主義をどう市民は理解しているのだろうか。冒頭から公民館の歌（自由の朝）を取り上げ、当時の気持ちと情景とが見えてくると言われ、テーマとつながっていきました。民主主義を支えているものは教養ある自由・自発・自主・自律的な国民であると言う。

学び・集う活動の拠点で民主主義を作り出し、一人ひとりが民主主義を育ていく場所が公民館であると言う。多種多様な分野で活躍されている、池上彰氏の記念講演ともあって、参加者は1400人でした。

後半のシンポジウム （ 5人のパネリスト ）

池上彰氏（ジャーナリスト）・

塩見みづ枝（文科省教育政策局社会教育振興総括官）

牧野篤（東京大学大学院教育学研究科教授）

吉田博彦（特定非営利活動法人教育支援協会代表理事）

松村真貴子（全国公民館連合会理事、フリーアナウンサー）

3か所をインターネットでつなぐパネルディスカッションです。

- 1つ目 北海道札幌新陽高校生は、公民館は必要なのか？と授業のなかで話し合い地域を知ることから始め、地域の活性化を目指すために公民館は必要であると、笑顔で語る姿が清々しく伝わってきました。
- 2つ目 島根県の益田市の事例で、子供達が地域社会の中で育てられ、ふるさとを捨てない教育、ふるさとを持つ教育が、公民館の中での活動となっていることに感動を覚えました。
- 3つ目 沖縄県の公園での出張公民館「パーラー公民館」で建物が無くても、市民が集い、学び、楽しむ場所となるコミュニティづくりがあったことです。一人ひとりが考えて、地域に関心を持ち、仲間と関わり、学びと言うことを媒介とし、地域課題に向き合い、地域の中で学びコミュニティづくりの場所が公民館であると、3つの事例から感じました。

勝谷美紀子

池上彰氏 「民主主義と公民館運動」

最近の世界情勢から、民主主義の成り立ちと、民主主義の怖いところを話されて、改めて民主主義は、個人個人の意識の上に成り立っている。そこから公民館活動が、その基本にあり自由に意見を言い、学び、集い、みんなで話し合うことが、民主主義の原点になっていることを強く言われました。

私は公民館を利用し、活用していること自体が、今の民主主義を支えている、維持していると改めて認識しました。このような考え方もあるんだな。狭い範囲のサークル活動にばかり目が行ってましたので目から鱗が取れた思いでした。

また、改めて池上彰先生のお話の上手なことに驚きました。

後半のシンポジウム

「公民館がひらく日本の未来」

村松真喜子氏（司会）、池上彰氏、塩見みず枝氏、牧野篤氏、吉田博彦氏

実際の3つの公民館活動をしているところをスカイプで生中継しあたかもTV放送を見ているように思わず見入りました。

まず、北海道の札幌新陽高校生らが授業の一環として近くの公民館を訪れ公民館の活性化を目指した話や、島根県の益田市の公民館の語り場を通して若い世代とお年寄りをつないでIターンしてきた人を中心に公民館を活性化し魅力的な場所としたお話です。あと沖縄の那覇市若狭公民館の話で建屋の無い広場のパーラー公民館の話です。建屋が無くても市民が集い話し合う場を作っていることでした。

3つとも公民館の一つの在り方を提供したことで、やればできるとの思いでした。お年寄りから学生、子供達を巻き込んで活動することで活性化を達成している、日本を元気にするように思われました。

久米 正幸

公運審 第40回 全国公民館研究集会東京大会 (11012018)

日頃、映像でしか知らない池上彰氏の基調講演 “民主主義と公民館運動” を直に聞きたくて参加した。

彼お得意の世界情勢と日本との関係に関する部分が長すぎて退屈したが、それより公民館活動と現在置かれている状況に関する解説というより、課題提供といった観点からの話が参考になった。

即ち① 地域活動を行う場所としての公民館、②社会教育と生涯学習一個人1人1人を大事にしていくこと、③ 米国では100万世帯が学校に行かずに家庭で勉強を教えることが許されていること、④ 日本の教育現場で現在社会の科目に“公共”が取り入れられることになったこと—これこそ公民館活動にも適用されるのではないかとの提言など。

新しい企画としてお金をかけない形でのネットで繋いだリアルタイムの映像とコミュニケーションが北海道、島根県、沖縄県の公民館活動団体と行われ、それぞれユニークな活動実態を見ることが出来たことなど優意義であった。

第2期目の委員になった目的である、多世代間交流の居場所づくりと情報受発信の最先端基地としての役割を担うべき公民館の在り方に関し、勉強できたことは良かった。

江口 建之



池上彰氏の講演の中で、特に印象に残っているのは、時間の有効利用についてである。大学教授、報道番組キャスターをこなす中、毎日13種類の新聞に目を通し、毎月25本の原稿の執筆をこなしているということに驚いた。

新聞は、まずザッと見出しのみを見ながら目を通し、引っかかりを感じた見出しの内容に関しては、更に深読みするという、新聞の読み方も参考になった。

また、原稿は空き時間などに原稿の書き出し部分だけは、考えておくことで、いざ書き始める際にサッと筆が進むという点も学ばせてもらった。毎週、名古屋の大学に行く際に移動中の車内で必ず何本かの原稿を書き上げるという点も、時間の有効活用であり、ある程度追い込む時間を自分自身に課す点がストイックであると感じた。

パネルディスカッションでは、スマホのインターネット中継で札幌、島根、沖縄と意見交換がされた。冒頭、札幌の高校生が公民館って必要なんですか？という質問を投げかけた。会場の参加者はほとんどが必要という返答であった。何故高校生がこのような質問をしたのだろうと考えた時、彼等の年齢にとって、今の時点では公民館は行く必要もなければ、行く時間もない場所なのだから、当然の質問なのかもしれないと思われた。

島根の公民館の話では、一時期、川の事故から川で遊ぶ子供が減った事を危惧して、大人たち（以前、川で毎日遊んで大きくなった）が、見守る中で子供たちが遊べるようにしたところ、川で遊ぶ子供が増え、キラキラした目で川の中で遊んでいる子供たちを見守る事が出来て、大人も嬉しいとのことであった。

川の子供は、川で育つ。自分たちが遊びながら育ててもらった川で、また子供たちが元気に遊んでいる姿を見守ることは、感慨深いものであるに違いないと思われる。

沖縄の公民館は、地域の公園に出向き、そこで地域交流を図っている。公民館という建物に入るのは、敷居が高くても公園であれば、自然に遊びに来ている子供たちと高齢者の方々との交流の場が作れる点は、学ぶべき点であると感じた。

小平市は、代々住んでいる人よりも、家を購入して他の地域から引っ越してきた方、大人になってから転勤で来た方などが多く、自分と同じ環境で育ってきたわけではない方も多いと思われる。だからこそ、何らかの形で地域の繋がりのための居場所が必要と感じる。今回の、全国公民館研究集会を通して、地域の中での公民館の必要性をより強く感じる事ができた。

私も、公民館運営審議会委員の一員として、公民館に縁のない方達により公民館の良さを伝えていく支援ができれば良いと改めて感じた。

大久保めぐみ

第40回全国公民館研究集会に参加しての感想

池上彰氏の特別講演では、人に分り易く語ると言うのは是も才能と感心した。公民館の歌（自由の朝）取り上げ、当時の高揚した気分が見えると言う意見には同感。「民主主義と公民館運動」というテーマでの内容が腑に落ちたと言う感は今ひとつないが、民主主義の仕組みから奇態な物が出てくるパラドックスは歴史的には事実で同意。

同氏の云いたかったのは「お任せ民主主義ではなく、創造力を」と云うことでは無かったのかと勝手に解釈した。

沖縄那覇の事例は人口34万人、公民館が7つの環境下にあるパラソルの、謂わば青空公民館。箱物がなくても公民館活動は出来ると云うユニークなもの、要するに、公民館の主要ファクターは”人”と主張しているもので、これも一つの形と言える。

札幌の札幌新陽高校にいては、残念ながら前知識が無かったので、公民館活動との関係で、あまり理解が出来なかった。

鳥取増田市の事例で印象的なのは、子供達が地域社会で育てられ、それが何割か後に、その地で活動をする、川の魚は戻ってくる考え、地方出身の者として、希望の持てる発想と嬉しくなった。

子供を育て守るのはコミュニティである、それによってコミュニティが持続・発展がある、と云う考えで仲間とボランティアをやっている小生として、この事例が一番良かったと、独断・偏見で評価したことを、お許し頂きたい。

菊地征夫



第 40 回全国公民館研究集会東京大会レポート

先日、池上 彰氏による「民主主義と公民館運動」と題する講演を聴講させて頂きました。

世界的な視野で民主主義の原点を探る講演で、ドイツ ワイマール共和国の崩壊、アラブの春、イギリスの EU 離脱、トランプのアメリカなど民主主義の弱点が現れた事例としてあげられていました。また、チャーチルは「民主主義というのは最悪の政治制度だが、それ以外の他の制度よりはましである」と言っていたそうです。そして池上氏は、民主主義は誰かがつくってくれるものではなく、自分たちでつくっていくもの。集い、学び、話し合うことが民主主義の原点であると語っていました。

最後に、民主主義の学校、これがまさに公民館運動である。と、お話を結ばれました。

シンポジウム「公民館がひらく日本の未来」では、池上氏をはじめ、文部科学省の社会教育振興統括官の方を含め識者の方々が参加されました。スカイプで公民館活動が紹介され、札幌新陽高校では、授業の一環として公民館活動を実施、また、益田市の公民館ではアイターンの女性が、東京ではなかなか出来なかったコミュニティづくりを現地で仲間達と行っている例。そして那覇市若狭公民館では、公民館のない地域に「パーラー公民館」と称して空き地にパラソルとテーブル、イスを置いて開館。図書館からも本が段ボール 1 箱分持ち込まれ、お年寄りや子供たちも集まり語り合っていました。

もともと日本家屋には必ず縁側があり腰をおろして談笑できましたが、今は高い塀で囲まれ閉鎖的になっているため、「パーラー公民館」のようなコミュニティづくりは大変参考になりました。

塩野 映一

記念講演「民主主義と公民館運動」 池上 彰氏

民主主義は、各々が学び、自由に意見を言い合うことを原点として成り立っており、またそれが公民館活動の原点ともなっている。しかし現代社会においては、それが問題となっている面も見られる。公民館活動は生涯学習の場であるといわれるが、この「生涯学習」は、個の学習、個を強くしていこうという考えが根底にあり、民主主義の懸念を考えると、社会全体で教育していこうという考え方である「社会教育」が必要となっている。

池上先生は日頃より「悩んだら初心に帰れ！！」という思いを大切にしておられるということで、この言葉が印象的でした。

シンポジウム

札幌・沖縄・益田の3か所の公民館の特色ある活動の紹介があった。いずれの地区も、公民館の建物から外に出て、あらゆる世代の交流の中で、それぞれの人がとても楽しそうに活動しており、その笑顔が印象的でした。

活動を通して、パネリストから、「ふるさとをつくる教育」というお話がありました。中学生までに地元の人と触れ合った子は、ふるさとのために何かしようとふるさとに戻る。詰め込み教育はふるさとをなくす教育で、ふるさとを捨てた人はサービスに頼る。

地域社会で「ぼく、大丈夫」といってもらえると自己肯定感が高まる。そして、自制心やもう一度頑張ろうとする能力はふれあいから生まれる、というお話がありましたが、これこそが公民館活動！！という思いを強くしました。

羽根田 厚子



あらたな公民館のあり方を模索する

1. 状況

(1) 少子高齢化の加速

特に高齢化の進展に伴い認知症が急増（将来的には1千万人に達するとの予測あり）

(2) 「自立」から「頼れる環境」への施策変更

・例えば元気な高齢者が補助が必要な高齢者の支援をする。

＊現状のお任せ民主主義が目指す「自立化」では結果的には「孤立化」になっており、目指すべき「相互依存」とは異なっている。

(3) 上記施策に向けて各省庁、各部局が対応策を検討しているが成果が上がっていない。

・施策が上手くいかない背景には、トップダウンであり現場の意見が反映されておらず、同時に地域に密着していない。

(4) 地域に密着には、自治会と公民館がある。

ただし、自治会は近所の関係が希薄になり交流も疎遠になりつつあり、対策になりづらい。

(5) このような背景において公民館の役割が多いに期待されている。

＊公民館の地域に果たす役割には、異世代間の交流による次世代へ引き継ぐこと、その循環を作ることも重要な役割。

2. 課題 1

(1) 公民館やそのサービスが一般に十分に理解されていない。利用者も限定されている。

(2) 対策

・利用していない層をターゲットにしたイベントの実施。（若者向けに人気があるアーティストを呼んで集客をおこなう）

・公民館が自ら外に積極的に向かう。学校、企業等とのコラボレーションの実施

・利用者に関するデータを分析して現状を把握する。

＊公民館が外に向かうためには、民間の協力や AI 等のシステムによる効率化で現業の負担を軽減していく必要がある。

3. 課題 2

(1) 公民館を統括している組長の理解や関心が薄い。このままでは、提供サービス・施設の維持が厳しくなる可能性がでてくる。

(2) 対策

・外にアピールできるような先進的な取組をおこなう。例えば今回の島根県、沖縄県での例。それ以外でも最新のテクノロジーを活用したサービス提供を目指す。

・課題 1 のデータ分析による具体的な成果を組長を含む一般市民に公開していくことが重要。（判りやすい資料作成、データ収集が必要）

3. 課題 3

(1) 公民館のできる業務の範囲を明確にする。

・認知症の高齢者が元気な高齢者にすべて依存していくことは簡単ではない。過度な期待は結果的に良い結果を生まない。できる範囲は決めておく必要がある。

＊認知症の予防への協力など

・サークル、セミナーへの積極的な勧誘

・魅力あるサークル、セミナーの開催

・施設に向かいでの支援

＊その他の支援策

・歩行困難者の地域間での協力による輸送

・デジタル活用の支援

矢島浩

第40回東京大会では、テレビ電話を通して地方会場と中継を繋ぐなど新たな試みがみられました。

池上さんのご講演をはじめ、全編にわたって「変わる」ということがテーマにありました。参加者の中では若い年代である私にとって、「何から、変わるのか？」ということが学べた大会でした。

基調講演で民主主義とは何かをわかりやすく解説してくださった池上さんのお話の中で、「生涯学習という権利は、自由によって自分たちで掴み取ったものである」ということを知りました。

その脈々と受け継がれてきた思いを大切にしながらも、現代のニーズに合わせて、「どう変わるのか」それが後半のパネルディスカッションへと続きました。

印象的だったのが、北海道の高校生からの質問です。「公民館は必要ですか？」という直球すぎる質問でしたが、現代の若者が公民館に抱く思いそのものではないかと感じました。

それに対して、牧野教授の回答が続きます。

「他人事を自分事にしていく想像力が必要です。」と。

まさに、地域であらゆる層にひらかれている公民館にとってはこの言葉がキーワードになるのではないかと思います。

自分のやりたい事ではなく、他人を含めて想像できる人たちがこれから必要な生涯学習を作っていくと感じます。

また、この想像力は人との関わりによって生まれていくそうです。公民館で多世代と交流していくことで、自分とは違う年代の人たちの問題を自分事に置き換えて考えられるようになるかもしれません。

そんな交流をたくさん演出していくことが、個が強くなった現代にあう公民館づくりのヒントになるのではないかと感じた講演会でした。



山田 早紀子